

## 2.1.1.作法書に見られる情報とその正統性

山田 慎也

### 1 儀礼と情報化

冠婚葬祭などの諸儀礼について、それを実施するためのさまざまな知識が作法書としてテキスト化されていく流れは前近代にも見られたが、特に近代になるとその流れは顕著になっていった。とくに印刷技術の発達によって、多様な種類の作法書が刊行されるようになっていく。

昨年度の報告でも取り上げたように、冠婚葬祭のテキスト化において、なかでも葬送儀礼に関しては、幕末から近代初頭にかけて、神葬祭に関する実際の作法や教義、儀礼や使用する葬具などに特化した書籍や記録類が刊行されている。これは明治維新に伴う政府の神道国教化政策によって、一般庶民への神葬祭の浸透を目的として、さまざまな神道家などが著述したものであった。

しかし、葬儀一般についての作法書などはあまりみられず、これが登場するのは明治中期以降であることを指摘した。そのなかで比較的まとまっている可南子の1905年刊行の『祝祭送迎婚葬儀準備案内』や、特に葬儀に関しては、川流堂小林又七発行の『葬儀要覧』(1914年)であり、この書籍は葬儀に関して特化しているだけでなく、職業軍人を主な対象としている点について考察を行った。地方から上京し職業軍人となって東京に長く居住するうちに、当事者及びその家族の葬儀を執行し、時には叙勲や叙位、さらに叙爵されるようになっていくなかでの具体的対応方法であり、新中間層から上流階層へと上昇していくなかで、葬儀に関する必要な知識が変化していくことに対応したものであることを検討したのである。

この『葬儀要覧』は職業軍人という特殊な分野の人に向けたものもあるが、特定の対象ではなく一般に向けての作法書が刊行されるようになっていく。とくに第二次世界大戦後、日本が高度経済成長を迎えるようになると、一般の人々に向けた作法書が爆発的に売れるようになるだけでなく、類似の書籍が多数刊行されるようになった。

そのなかで一般書として大ベストセラーとなったのが、カッパ・ホームスシリーズの塩月弥栄子の『冠婚葬祭入門』(1970年、光文社)である。そこで本論では、この『冠婚葬祭入門』によって、何をとりあげ提示しようとしていたのか、その内容を検討することで、当時求められていた情報の性格について検討していきたい。

### 2 『冠婚葬祭入門』の概要

戦後の作法書のなかで大きな影響を及ぼしたのが、塩月弥栄子の『冠婚葬祭入門』である。これは1970年に初版が刊行され、208刷で320万部を売り上げた(「ロングセラーの周辺」『読売新聞』1997年10月25日付朝刊)。その後『続冠婚葬祭入門』、『図解冠婚葬祭』、『続々冠婚葬祭入門』とシリーズで刊行され、累積700万部が販売された。それ以降も塩月弥栄子は様々な作法書を刊行している。1991年には、これらをまとめた『新冠婚葬祭入門』が刊行され、それも9刷りとなっている。さらには、1987年には講談社より『塩月弥栄子の冠婚葬祭事典』も出版されている。

本書の著者略歴によれば塩月弥栄子は、「1918年、裏千家十四代家元千宗室氏の長女と

して生まれる。現在、東京・麻布で「養和会」を主宰し、茶道研究につとめている。また、ボーリングは、プロ級の腕前。夫君は医博・塩月正雄氏。」とある。さらに『読売新聞』「追悼抄」（2015年6月20日付夕刊）によれば、若いときは陽気で奔放な性格で、乗馬やボーリングなどスポーツを好んだという。二十歳で東京に嫁いだが、後に離婚、塩月氏と再婚したという。1958年に茶道教室「養和会」を設立、1960年代にはNHKのクイズ番組にレギュラー出演し人気を博したという。そして2015年3月8日、96歳で老衰にて亡くなった。

NHKのテレビ番組にレギュラー出演して、社会的に著名であった1970年に『冠婚葬祭入門』は刊行されたのである。塩月は、その構成についてまえがきで「この本の特徴は、項目をすべて時間を追ってならべたことです。大きくは人間一生に起こる事柄の順序にしたがい、また、一つ一つの行事についても、行われる順序どおりに話を進めています」としている。ただしその順序は「婚」「冠」「葬」「祭」であり、冠婚葬祭ではない。そして「祭」は、本来、先祖の祭りであるが、本書ではその部分を年中行事として取り上げており、本来の趣旨や変更の経緯については触れられないことなのである。

### 3 婚-「見合いから結婚まで」

「婚」について、目次は「見合いから結婚まで」として、1から155の項目があげられる。1「結婚は、人生でもっとも慶祝すべき盛儀である」では、総括の位置づけで、他人が縁あって長く生活を共にする契りの式であることから、もっとも慶祝すべき行事と述べている。こうして見合い、結納、婚約、挙式、披露、新婚旅行と項目を連ねて述べているのである。

その始まりが「見合い」である点は、まだ当時の結婚の状況を示している。そして見合いの項では作法というよりも、実際の見合いの進め方に力点が置かれて説明されている。まず2「縁談にはまず正確な情報を伝えよ」では、盲目的な恋愛結婚よりも交際相手を求める合理的な手段として、見合いは古いものではないと塩月は肯定している。そのためには紹介者への写真を3,4点預けることで、縁談の時間的ロスをなくすと効率性を述べる。こうして見合いのやり方など22項目を設定している。

つぎに24から41までが結納及び婚約であり、41では「婚約破棄は堂々と発表する」とその破棄のあり方まで言及している。

42から挙式、披露宴であり、ここでは当事者だけでなく参列者も対象となっている。42,43は結婚式の日取りであり、42で新婦の生理日を考慮し女性が決めるものとし、43では参列者の都合のよい日が吉日とされている。その後、結婚式の形態であるが、キリスト教の結婚式についてとりあげ、45では信者でなくとも紹介者によって教会で式を挙げられる点や、キリスト教結婚式の欧米での形態について述べている。47では人前結婚式について触れ、従来の形式に抵抗を感じて様々な形があるとして、神仏を祀らない人前結婚式を取り上げるが、内容のない式にはしたくないものと指摘する。

また招待状の出し方、返し方や結婚祝いの贈り方など実務的な内容が続いていく。49招待状の差出人については、本人名とすることが多くなったとし、婚姻届を出してはじめて一家をなすので、披露宴までは親の名前をとす意見があるとしても、招く客によって友人が

多い場合には本人たちがいいとしている。ただ、本人名の招待状に両親の挨拶文を添えた事例を取り上げ、是非おすすめしたい方法と紹介しており、折衷案を個別事例として取り上げている。

62よりは結婚式の花嫁の衣装についての作法となり、まずウェディングドレスの着方で、62は頭飾り、親から受け継ぐ物、花嫁の下着の色など、欧米起源のウェディングドレスの作法を現代の日本にも対応できる形に再解釈して紹介している。65では、再婚時のドレスについて、白を着ないのが決まりであったが、白を着ても差し支えないと断じている。それは色ものを着ることで再婚であることを宣伝する必要が無いからとしており、その時代的な判断の根拠は示されていない。花嫁の和装についても66から69まであり、打掛けを作る、借りる、双方のメリットを取り上げ、打掛けの下の着物を新たに仕立てて後々使った、自らの弟子の例を取り上げている。一方で意外と項目を割いているのが、花婿の服装であり、70から80までと花嫁よりも多く占めている。これは欧米のドレスコードが日本では取り入れられていないことで、欧米での様式の説明に紙面を割いている。

81より挙式の席次が始まり、まず神前式、教会式など儀礼の過程が紹介され、三三九度の酒を飲み干す必要ないなど、実務に適応したものとなっている。97からが披露宴で、その場所についてはホテルや結婚式場用の会館、レストラン、公共的な集会場などが多いとし、受付に配慮すべきとしている。また披露宴の服装については、参列者の服装に関して、夫々の立場として紹介されているが、そこでは自らの経験も述べて、花嫁などを立てるべき事を主張している。

また120では頼まれ仲人の挨拶では、仲を取り持ってくれた人を挨拶で紹介すべきなど、仲人の役割が変化している時期に考慮したものが提示されている。さらに、披露宴での具体的な対応の仕方、たとえば花嫁の食事はオードブルやデザートなど軽いものなどにする、花婿と花嫁のヒソヒソ話などを戒めるなどが書かれている。

そして新婚旅行は142から155までであるが、これは新婚旅行だけでなく結婚後のお礼なども含まれ、仲人のお礼は結納金の2,3割が適当としたり、また特別お世話になった人には現金が習慣となっているなど、かなり断定的な記述となっている。

#### 4 冠-「出産から卒業まで」

「冠」では、156から198の43項目であり、目次としては「出産から卒業まで」となっている。「冠」とは元服の意味であるとの表題で、このコーナーは結婚をした二人が社会的に独立して、子どもを持つことで保護者の立場になるので、妊娠中から子どもが一人前になるまでの親として知るべきものを提示しているという。ここではマニュアルとしての実用性から、親の立場の作法書として展開しているのである。

そして157から182までは妊娠、子どもの誕生、初節句まででその大部分を占める。結婚したての若者を対象にしていることがこの点からも窺える。そして、妊娠の節目となる着帯からはじまり、出産、命名、へその緒の扱い、お七夜、お宮参り、お食い初めなども儀礼を中心に記載されている。

成長の段階では、七五三などは一般的な内容であるが、特徴的なのは学校や家族旅行、習

いごとなどのお礼の取り扱いである。学校の先生へのお礼はクラス全体ですべきなどとしているが、子どもが友達とその家族との付き合い方に関して、友達の家族旅行へ連れて行ってもらった場合には費用の負担や見合ったお礼をすべきなど、実践的な対応を記述している。

またおけいごとなどの先生へのお礼はこの著者ならではであろう。そこでは盆暮れの際や発表会への先生へのお礼もすべきと述べている。そしておけいごとの発表会に呼ばれた場合には、招待する側が切符や会場費、衣装代などの費用がかさむので、お祝い品は現金が最も喜ばれるとしている。そのほか、花輪などの場合には会場に確認をするなどの、おけいごとならではの慣習についても言及している。なかでも日本舞踊について「舞踊の発表会は、とくにしきたりがうるさいものです」として、項目を立てて取り上げている。招待した人に対しての記念品には出し物にちなんだ絵や模様の品物や、顔師、着つけ、かつら、後見、地方、拍子木などの裏方へのお礼や費用のあり方など、特有のものも紹介している。最後の方には成人式や就職の依頼、紹介状など、子どもが成長し社会に出るまでの過程で必要な点まで言及している。

## 5 葬-「通夜から年忌供養まで」

「葬」は「通夜から年忌供養まで」の199から295の97項目で、「葬式は、通夜、葬儀、告別式、出棺の順で行なわれる」とある。そして、葬式は人生の最終の儀式で、凶事のなかでももっとも大きな儀式であるため、肉親と近親者が死に目に接し、通夜、葬儀から年忌供養まで順を追って説明するという。葬式は仏式、神式、キリスト教と式次第が異なり、宗派によっても違うため、一般的な仏式に従い、その合間に、キリスト教と神式の説明を加えるという。こうして宗教ごとの違いよりも仏式葬儀を基本としつつ、神式、キリスト教に目配せをしている。

ただし、こうしていても習俗的な要素からコーナーは始まる。まず末期の水であり、その後は湯灌となっている。湯灌については「遺体はアルコールでふき、女には薄化粧をし、男はひげを剃る」としており、「死亡が確認されたらまず遺体を清めなければなりません。アルコールで全身を拭い、女性ならば薄く化粧をし、男性ならばひげを剃ります。また汚れ物が出ないように、鼻、耳、肛門に綿の栓をつめ、目と口は軽く閉じさせます」として、これら一連のことを湯灌としており、昔はぬるま湯をいれた話を一応は出しているが、完全に近代の看護学における清拭が、湯灌として取り上げられている。

湯灌の後は死装束であり、近親者が複数で縫う「引っ張り縫い」や糸止めを作らないなどの習俗も紹介されているが、当時は生前好んだ着物を着せ、紙製の経帷子を掛けるのが一般的と述べ、それが続いていないという。さらに左前の着付けや手甲、脚絆などの旅支度を述べるものの、今では数珠程度としている。さらに遺体は北枕にしたり、守り刀を魔除けとするが、その代わりに剃刀を代用してもよいという。さらに一膳飯や枕団子を用意するとしているが、そこでの団子の仕上がり具合によって死者の未練を占うなどの民俗が紹介されているなど、民俗的な記述もそれなりに見られる。

そして212「喪主は妻がなってもよい」では、戦前は一家の主人が死ぬと「法的な相続人である長男」が喪主になったと述べた後、「現在では夫が死んだときは妻が喪主になるのが

自然だと思えます」と言い切るが、子どもが大人になっていけばよいが、幼児を形式的に喪主にするのはおかしいとしている。それは喪主の責任はたいへんだからであると閉じている。

こうした遺族としての作法の中で、弔問客としての心得も挟まれている。とりあえずの弔問は平服で行うこと(213)、また親しくない関係の場合の弔問は玄関先で、さらに、故人との対面は遺族から勧められない限りは言い出さないなどの弔問の仕方、また216「通夜に出れば告別式に出席しなくてもよい」では、あまり親しくない人は通夜を遠慮すべきとしながらも、今日では一般の弔問客が告別式には都合が悪くて出席できないからせめて通夜に出ようというようなこともあります、と現状を追認しつつ、それをよいこととしている。時代的には、高度経済成長を迎え、通夜の告別式化へのはじまりの時期でもある。

葬儀の日程について、今日では葬儀の日取りは死亡の翌々日になる場合が多いという。そして友引、丑寅などは根拠があるわけではないとしつつも、年寄りや迷信深い人が嫌がるのならば避けるべきであり、友引は斎場や火葬場が休みのところが多いので、結果的に避けるべきとしている。葬儀の形式については、故人の宗教に合わせて行うのが順当としている。また場所についても、本葬儀は家が狭くて会葬者を収容しきれないという場合には、仏式では寺、神式では神社、キリスト教では教会とのべ、実際には神社での葬儀はないものの、前述のような記述になってしまっている。

そのほか、葬儀後の法要の方式などもあるが、当時の認識として納骨は初七日に行うのが一般的であり、葬儀の翌日から遺骨を寺に預け、三十五日や四十九日に納骨を行うこともあるという。さらに遺骨を自宅において四十九日に寺で法要をして納骨する例も多いとしており、初七日納骨から次第に伸びていることがわかる。さらに仏壇の用意や祀り方、年賀欠礼や年忌法要なども項目が挙げられている。

## 6 祭-「元旦から大晦日まで」

「祭」は「元旦から大晦日まで」296から390の95である。正月行事からはじまり大晦日まで展開しているが、特に項目が多いのが正月で、297から319項目で、まず除夜の鐘から始まる。そこでは塩月の実家で行われた大晦日の除夜釜から始まり、除夜の鐘を聞きながらの茶の集まりでは年越しそばも食べていたという。そして除夜の鐘が終わると新年の挨拶をするという。こうした裏千家の行事について述べているのは、若水も同様で、299「正月は水道の蛇口に輪じめを飾る」では、正月の若水について、家元が朝4時頃井戸から若水を汲んで釜を掛ける裏千家の事例を取り上げ、井戸のない都会では水道に輪じめを飾って若水を汲むことをよいこととしている。

さらにお節に続き、屠蘇だけで3項目を割き、屠蘇のやり方を述べた後、屠蘇器の代替方法を紹介し、また屠蘇の代わりにぶどう酒であることなども若々しい雰囲気を感じさせるものと評価している。雑煮では、三が日に異なる種類の雑煮を食べる実家の例を挙げつつ、年神への身祝いとしての意味を提示している。その後は年始回りやお年玉、初夢、七草がゆ、鏡開き、小豆がゆ、とんど等を紹介している。またお茶の初釜の作法の紹介なども、塩月ならではであろう。

二月以降は節分、初午、バレンタインデーを取り上げている。ひな祭りは男雛、女雛の位置づけや、関西と関東のひな壇の違い、ここでも塩月の幼少の頃の雛人形について言及している。その後彼岸の墓参や団子など、彼岸についても説明が多い。

新年度に関する行事の項目も多く、餞別の贈り方やその対応、上役の栄転、引っ越し先の挨拶、社宅への引っ越しなど、若い社会人の社交マナーとしての紹介が年中行事として述べられている。その後エイプリルフール、灌仏会となり、五月節句となる。五月人形や鯉のぼりの飾り方、また菖蒲の取り扱いなどで項目は終わられている。

夏には、衣更、七夕、中元となり、中元を含めた贈り物に関しては350から360まで項目が続いている。そこでは贈答品の選び方や贈り方だけでなく、金封における新券紙幣の扱い、商品券の選び方、受けたくない贈り物の返し方まで言及し、社会人の社交に関連したものとなっている。そして盆については、盆の意味、盆提灯、盆棚、盆の供物、精霊送り、盆踊りなど、盆行事の一連の項目を割いている。

秋には敬老の日、賀寿の祝い、月見、酉の市などシンプルに述べられている。年の暮れには針供養、歳暮、年賀状、冬至、クリスマス、注連飾り、餅つき、すす払い、年越しそばで、おわっており、はじめの除夜と繋がって、本文が終わっている。

## 7 求められた知識と正統性

このマニュアルは個別の事項ごとの記述であり、それぞれ個々に読んでも完了する点で、分かりやすい点が特徴である。そこでは、基本的にそれぞれの儀礼の典拠を詳細に出すよりも、塩月の実家である裏千家での事例や自ら主催する茶道教室の弟子達の行動など具体的な事例を挙げることで、具体的な実践が重視されている。

さらに時代的に儀礼が変化しつつある場合には、表題として変化した後の新規の儀礼をあげながら、その説明の中では折衷案を提示し、旧来の儀礼と新たな展開との折り合いとを提示しているのである。こうしたいくつもの事例については、かならずしも時代的妥当性だけでなく、塩月の嗜好も大分入っているように感じられる。こうした儀礼の変容に関しては単に時代的な変化として挙げるだけでなく、それを主張する塩月の属性が重要であると考えられる。

塩月は、茶道を大成した千利休を始祖とする三千家のひとつ、裏千家家元十四代淡々斎千宗室の長女である。こうした茶道という日本文化の代表的な芸道を継承する家の生まれであり、自らも東京で養和会という茶道教室を主宰していることは、儀礼について論じることに、周囲もその正統性を認めることが可能となる。

一方で裏表紙には小さい頃から塩月と交流のあった俳優の高峰三枝子の推薦文が掲載されている。それによると塩月は、「ボーリングの名手と自他共に認めるほど、現代的でぎっくばらんな方です」と紹介されており、現代的で新たな文化の理解者であるとのキャラクターも有し、NHKのクイズ番組のレギュラー解答者として人気を博すなど、社会的認知を得ているなかで、儀礼文化の変容に関するその正統性を担保していたことで、本書は大ベストセラーとして、一般に受容されていったと考えられる。